

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 村で暮らしている人間にとっては、動物に対する評価は今日でも複雑である。私が暮らす上野村だけでなく、一九九〇年代に入った頃から作物の動物による被害がほとんどの山村で激しくなっている。ジャガイモ、ヤマイモ、大豆が食べられてしまうのはイノシシの仕業で、大豆はサルが食べにくることもある。サルはネギ、シイタケ、くだもの、ときにカボチャやスイカ、白菜なども狙ってくる。もうひとつ被害の大きい動物にシカがいる。シカは葉のあるものなら何でも食べる。イノシシのいない東北の山村以外では、ほとんどの山村でイノシシ、サル、シカが田畑を荒らして、村人は困りはてるようになった。

このような状況が発生しているのだから、これらの動物は村人にとっては害獣である。しかしこんな事態になってもなお、村人は動物に対して、同じ村に暮らす仲間だという意識ももっている。村という言葉は、伝統的には、人間社会を意味する言葉ではなく、自然と人間の暮らす社会をさしている。とすれば動物もまた村のメンバーであり、共同体の仲間である。

※
実際村人は、動物をみる多様な視線を並存させてきた。ある種の動物は、ある場合では害獣である。しかしその前に村に暮らす仲間と、ところがその動物は冬の猟期には狩猟の対象にもなる。その一方で人間以上の能力をもった生き物として尊敬され、さらに神の世界への道筋を知っている霊力をもっているとあがめられることもある。こういうかたちで語られるときの神とは、自然そのものであり、自然の真理とでもいうべきものであるのだが。

※
このように述べていくと、人間と動物の関係が矛盾しながら重なり合っていることに気づかれるであろう。仲間だいいながら狩の対象にもする。尊敬を払いながら、害獣ともみなす。どう考えても、矛盾した関係が並存してい

るのである。

それを人間がもたざるを得ない絶対矛盾としてとらえるのが、日本の伝統的な民衆精神だったのではないかと私は思っている。

A、生きるために、ときに動物から畑を守り、ときに動物を獲^とって食べたり皮を得たりすることは許される。なぜ許されるのかといえば、自然の生き物たちもまたそうしているからである。鳥は木や草の実を食べるし、キツネは野ネズミや野ウサギを追う。虫は草や木の葉を食べる。自然がそのような関係になっているなら、自然の一員としての人間にも同じ^②ことが許されるはずだ。

ところが人間はややこしい問題を背負わされている。それは自然の生命を採取したり、動物と対立したりする理由が、純粹^{すい}な生命的な行為^いなのか、それとも自分の「欲」がからだ行為^いなのかを明確にできない、という問題である。

B 狩猟^{はく}によって動物を捕獲^{とく}するとき、それがキツネやタカ、ワシと同じことならそれは「自然の行ない」である。ところが人間は「自然の行ない」としてそうするだけでなく、狩猟によって富を得ようという意識ももつし、ひとつの自己主張、自己表現として狩猟をおこなうというような面をも併^あせもつ。後者は「自然の行ない」ではなく、「自己」、あるいは「我」、「個我」をもつ「人間の行ない」である。「自己」があるから自己目的が生じ、それがときに富の増加をめざさせ、ときに自己主張や自己表現を目的意識として生じさせる。

※^③とするとこのような「人間らしさ」は肯定できるのか。

私は「できない」と日本の民衆は考えてきたのではないかと思っている。ここでいう日本の民衆とは、自然とともに、自然のなかで暮らしてきた村の人々のことであり、都市の人々はとりあえず除外して、私はこの言葉を、ここでは、用いている。そうしないと自然とともに生きた人々の精神を明らかにすることができないからである。

それが「自然の行ない」なら肯定できるが、「自然に反する行ない」なら肯定できない。しかしそう考えたとしてもまだ問題は起きる。なぜなら人間には、「自然の行ない」と「自然に反した行ない」との間に、区別^{くべつ}しきれない部分があるからである。

たとえば富を蓄積^{ちく}したいと考えたときでも、そのことによって権力を得ようとか、裕福^{ゆうふ}な暮らしがしたいということとなら、明確に自然に反するだろう。なぜなら自然の生命たちは、そんなことは考えないからである。ところが将来訪^{おとず}れるかもしれない苦境^{くきやう}に備えるために、多少は富を蓄積^{ちく}しておこうというのならどうなるのか。自然の生き物でも、リスや野ネズミなどは、多少の食料を備蓄^{ちく}するし、蜂^{はち}は冬を越^こすために蜜^{みつ}を貯^{たくわ}めるのである。とすると多少貯めこむのは生きるための行ないといえなくもない。

C、^④それでもなお人間がおこなう貯^{たくわ}えは、自然界の生き物のそれとは違^{ちが}っている。ひとつに自然界の生き物は必要量しか蓄積^{ちく}しないが、人間はその必要量がわからないから、不安がある限り貯^{たくわ}えを増やしつづけることになる。もうひとつは、たとえばリスや野ネズミも匿^{かく}しておいた木の実などを食べきらずに、そのまま残^{のこ}してしまうことがある。ところがそのことによって木の実が遠く^{とほ}くに運ばれ、木にとってはそれがむしろ有効性をもつ。つまり残^{のこ}すことが無駄^{むだ}になっていないばかりでなく、自然というつながり合う世界から、リスや野ネズミの行為は離^{はな}れない。それに対して人間の同じような行為は、あくまで自己自身のため、せいぜい家族のための自己目的的行為であり、つながり合う世界が消えているのである。

それならわずかな貯^{たくわ}えでもいいけないのか。それを否定されてしまったら、生きつづけるという行為自体が人間には成り立たない。

問題はこの両者の境界線がわからないことにある。なぜそうになってしまうのか。それは人間が自己自身の生に対する

る不安をもっているからであり、そうであるかぎり不安が解消されなければ、自分の課題も終了することがない。不安をとおしてものを考えるから、解消されるまで際限がない。しかも生に対する不安は個人的なものだから、結び合う世界をもちえないのである。

(内山・節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』講談社現代新書)

※害獣……人や家畜に直接害を与えるもの。また田畑を荒らすけもの。

※並存……二つ以上のものが同時に存在すること。

※肯定……正しい、優れているなどとして、その存在や意義を認めること。

※苦境……苦しい境遇。困難な立場。

問一 A C に入れるのにもっとも適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ ところで ウ しかし エ また オ もちろん カ そして

問二 線部①「村で暮らしている人間にとっては、動物に対する評価は今日でも複雑である。」について、次のⅠ・Ⅱの各問いに答えなさい。

Ⅰ 筆者の考える「村」の意味を、本文中から十字程度で抜き出して答えなさい。

Ⅱ 「村で暮らしている人間にとっては、動物に対する評価は今日でも複雑である」理由がはっきりと述べられている部分を、本文中から「」から。」につながる形で二十五字以内で抜き出して答えなさい。

問三 線部②「同じこと」とありますが、これはどのようなことを指しますか。二十字以内でまとめて答えなさい。

問四 線部③「人間らしさ」とありますが、これと同じ意味を持つ表現を、ここより後の本文から二つ、それぞれ十字以内で抜き出して答えなさい。

問五 線部④「それでもなお人間がおこなう貯えは、自然界の生き物のそれとは違っている。」とありますが、どのように違いますか。筆者の主張をふまえて、本文中の言葉を用い、二点に分けてそれぞれ六十五字以内で答えなさい。

問六 次の中で、筆者の主張と合っているものは○、合っていないものは×で答えなさい。

- ア 動物も人間も自然の動物を獲って食べるが、それは同じ自己目的的行為として、民衆は肯定してきた。
- イ イノシシやサルやシカが田畑を荒らすようになり、村人の、動物に対する仲間意識は低くなってきている。
- ウ 村の人々は、動物に対して、矛盾するさまざまな視点を持ちながら、それを認め、ともに生活してきた。
- エ 民衆は、自然の生命を採取したり動物と対立したりすることを、自己のための行為ならば肯定してきた。
- オ 人間も動物も、つねに自然というつながり合う世界をもつことが、自然とともに生きることにつながっていく。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

監督から期待されていた加納碧李は高校一年の秋、一万メートルのレースでみじめな負け方をして、一週間後に退部した。しかし、天性の長距離ランナーである碧李は迷った末、二年になって再入部する。碧李の両親が離婚した現在、碧李は母と妹の杏樹と暮らしている。実は杏樹は碧李の父の弟の娘で、弟夫婦が交通事故で亡くなり、養女として引き取ったのだった。離婚した後も母は杏樹を受け入れたが、別れた夫への憎悪が次第に幼い杏樹への虐待となり、碧李はそのことにも悩んでいた。

「よろしくお願いします」

碧李は、前に並んだ陸上部員たちに向かって、深々と一礼をした。

ざわりと空気が動く。声とも音とも異質のざわめきが頭の上を過ぎていった。軽く息を呑み込んで、顔を上げる。視線がぶつかってきた。柔らかな甘くもない。冷ややかに、戸惑うように、棘を含んで、碧李に突き刺さってきた。「まあ、みんなも知っているように、いろいろな事情があつて加納は一度、退部したけれど、こうして、また戻ってきた。陸上部員として、いっしょに励んでもらいたい」

東部第一高校陸上部監督、箕月衛の言葉にざわめきはさらに広がり、ざわめきは視線に収斂して箕月監督の横に立つ碧李にぶつかってくる。

② 碧李は顎を引き、身体の横でかく手を握り締めていた。

「監督」

武藤が手を挙げる。夏の大会までチームを引っ張っていくキャプテンだ。三千メートルで県内三位の記録を持つ。

「加納は一度、辞めた人間です。再入部するのは勝手だけど、新入部員と同じ扱いということでもいいですか」きれいに整えられた眉の下で、ぎょろりとした特徴的な目が碧李を凝視している。

「むろんだ」

箕月が即答する。列の一番端にいた三年生マネジャー前藤杏子が微かに身じろぎした。

「学年は関係ない。入った時点では誰もが新入部員というのは、鉄則だろう。これから入部してくる一年生と同じ立場でかまわん。いいな、加納」

「はい」

当然だろう。どんな理由があるにしろ極めて個人的な都合で部を辞めた人間だ。すんなり、元の場所に戻れるわけがない。ガンゼンに並ぶ陸上部員たちの非難も批判も受け止めなければならぬ。覚悟はしているつもりだった。

「よし、では、各自、軽いストレッチの後、ランニングに移れ。明日の入学式で、グラウンドはリンジ駐車場になる。準備のため三時までしか使えない。基礎練習を主に効率よくこなせ。それから、久遠」

「はい」

新二年生の列から久遠信哉が手を挙げた。

「おまえ、練習だいじょうぶなのか？ 無理をするな」

「ランニングぐらいなら平気です」

「そうか。しかし、痛みが強くなるようなら、即、止めとけよ」

「はい」

久遠は腰を痛めていた。ハードルを使うのはまだ無理だが、練習には出てきていた。視線が合う。久遠が口元を綻ばせ、軽く片目をつぶった。

③何故、退部したのか。久遠にも告げていない。いずれ話したいと思う。杏樹のために、幼い妹を守るために辞めたのだという自分で自分を誤魔化すための理由ではなく、本当のことを語りたい。

なあノブ、おれな、走るのが怖くて、トラック競技が嫌で、一万のレースが怖ろしくて、びびってる自分を認めたくなっておれは走れないんじゃない、走らないだけだ、そう信じたくて、逃げちまったんだ。親のせいにしていたら、妹のためだと思っていたら、すごく楽だった。しかたないんだ、こうするしかなかったんだって、おれ、ずっと自分に言い聞かせてたんだ。笑えるよな。笑えるだろう。笑われてもしかたないほど、卑怯だった……。

④久遠なら、ちゃんと聞いてくれるだろう。ただ黙って、わざと気のない様子をして聞いてくれるはずだ。今はまだ、きちんと告げられる自信も自分の本当の弱さを晒す決心もあやふやだけれど、もう少し強くなれば、走ることから目を背けずにいられたなら、そのときは久遠に向けてぼそぼそと語ってみよう。

「よし、ランニング始めるぞ」

武藤の声が響く。碧李はシューズの紐を固く結び直した。野球部やサッカー部が練習しているグラウンドの外縁をなぞるように、陸上部の一団が走り出す。碧李は最後尾についた。

足元を風と一緒に桜の花びらが過ぎていく。今晚から明日早朝にかけて雨が降ると聞いた。花散らせの雨となるのだろう。一週間前に淡雪が降り、雪融け水がまだ消えないうちに桜は開花した。そして、もう満開となり散り始めている。桜とは、こんなにも生き急ぐ花だったろうか。

ふっと空を見上げてみる。薄雲が広がっているだけだ。雨になるとは思えなかった。

⑤杏樹、ちゃんとやっているかな。

妹のことを考える。今日は小学校の入学式だ。

「有香ちゃんやありさちゃんと同じ組だったら、いいなあ」

今朝、杏樹は何度もそう繰り返していた。いつもより、ずっと緊張して見えた。仲良しの友人の名前を呟くことは、緊張をほぐすための杏樹なりの儀式だったらしい。

妹は愛しかった。それは、嘘偽りのない感情だ。あの笑い、あの温もり、あのまなざし、無防備な甘え、無邪気な仕草、そして六歳になったばかりの幼女が背負うには過酷としか思えない運命。守ってやりたい。杏樹が一人で自分の背負うたものに立ち向かえるほど大きくなるまで、この手で抱き締めて庇護してやりたい。強く思う。

誰かを守りたいと強く思うことは、その誰かに守られていることでもある。杏樹が教えてくれた。

身体が温まってくる。走り始めると、身体を取り巻くもの、一つ一つがそれぞれの存在を際立たせてくる。血の流れとか、シンゾウの鼓動とか、氣道を滑っていく空気とか、大地の感触とか風とかグラウンドの湿り気とか匂いとか、みんな競うように鮮明になり、存在感を増してくる。そして、吸い込まれていくのだ。

碧李は、身体を取り巻く全てが遊離し周りに吸い込まれていく感覚に自身を委ねる。無ではない。何かがある。自分という小さな核は、磨耗することも砕けることもなく確かに在るのだ。桜の花びらが散るように、核に纏いついていた諸々のものが落ちていく。どんなに愛しい者のことも、深い苦悩も、胸震える喜びも剥がれ、漂い、消えていく。妹のことも母のことも、はらはらと散っていく。

⑥走るとはそういうことだった。

走り、走り、そのハてに人の決めたゴールがある。人は走り続けることはできない。だから、終着点を決めるしか

ないのだ。^⑦ゴールを突き抜けさらに走れば、どんな風景が広がるのか。疼くほどに憧れもするけれど、今は到底、手が届かない。まずはゴールを目指す。

晴れ上がった秋空の下で無残に歪んだゴールラインに今度は、しっかりと走り込んでみせる。走ることを怖れるのではなく、小さな核となった自分を抱いたままテープを切ってみせる。走ることを裏切ったまま、自分を誤魔化したまま終わりにしたくはなかった。

(あさのあつこ『ランナー』幻冬舎)

- ※収斂……集まって一つにまとまること。
- ※凝視……目をこらしてじっと見つめること。
- ※鉄則……改めたり破ったりできないきびしい規則。
- ※過酷……きびしすぎること。
- ※庇護……かばいまもること。
- ※氣道……肺に流入する空氣の通路。
- ※核……物事を中心にある重要なもの。
- ※磨耗……すりへること。

問一——線部(a) (e)のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二——線部①「ざわめき」には陸上部員たちのどのような気持ちが込められていますか。もっとも適切でないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア とまどい イ おどろき ウ 非難 エ 疑い オ 悲しみ

問三——線部②「碧李は顎を引き、身体の横でかるく手を握り締めていた。」とありますが、このときの「碧李」

はどのような気持ちでしたか。本文中の言葉を用いて、四十字以内で説明しなさい。

問四——線部③「何故、退部したのか。」について、次のⅠ・Ⅱの各問いに答えなさい。

- Ⅰ 碧李はなぜ陸上部を退部したのですか。本当の気持ちを十五字以内で答えなさい。
- Ⅱ それでは、どのような気持ちから再入部したのですか。もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 家族のせいにして走ることを止めてしまったが、そんなごまかしがばれて仲間になまいと思ふ気持ち。
- イ 途中で逃げ出してしまった自分の弱さと向きあい、走ることにへの思いを確かめようとする気持ち。
- ウ 自分でもどうして止めてしまったのかよく分からなくなつて、その理由を確かめようとする気持ち。
- エ 卑怯にも走ることから逃げ出した自分を許せなくなつて、そんな自分に罰を与えようとする気持ち。
- オ 体力の限界を感じ自分なりに納得して止めたが、やっぱり走ることが好きだから走りたいという気持ち。

問五——線部④「久遠なら、ちゃんと聞いてくれるだろう。ただ黙つて、わざと氣のない様子をして聞いてくれるはずだ。」とありますが、この表現から碧李が久遠を信頼していることが分かります。このような信頼を抱かせる久遠の、碧李に対する思いがよく表れている一文を探し、初めと終わりの五文字を抜き出して答えなさい。

問六——線部⑤「杏樹、ちゃんとやっているかな。」とありますが、これは今日入学式を迎える杏樹のことを碧李が考えている場面です。碧李は妹の杏樹に対して日ごろからどのような気持ちを抱いていますか。本文中の言葉を用いて、三十字以内で答えなさい。

問七——線部⑥「走るとはそういうことだった。」とありますが、碧李は走ることの魅力をどのようなことだと感じていますか。六十字以内でまとめて答えなさい。

問八

——線部⑦「ゴールを突き抜けさらに走れば、どんな風景が広がるのか。」とありますが、あなたが今目指しているゴールは何ですか。また、それを「突き抜けさらに走れば」どんな風景が広がると思いますか。百字以内で具体的に述べなさい。